

Research Expectations

特集：SDGs（持続可能な開発目標）



関東学院大学

<http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/>



みんなの未来が、 シアワセであるために。

2015年の国連サミットにおいて全会一致で採択されたSDGs(Sustainable Development Goals=持続可能な開発目標)が、世界的な広がりを見せています。

ここで示された目標が、個人、企業、政府・自治体の行動に少しずつ変化を起こそうとしているのです。

「地球上の誰一人として取り残さない」という高い理念は、人類全体で共有が可能な財産になろうとしています。

私たちの世界は、急激な人口増加にともなう食糧不足や、深刻な気候変動など多くの課題に直面しています。開発途上国と先進国との格差も、解消のメドすら見えない長年の懸念事項です。

これらの課題は、決して遠くのどこかで発生しているものばかりではありません。
私たちの身近な暮らしのなかにも、解決すべき課題は数多く存在しているのです。

関東学院大学が立地する神奈川では、神奈川県、横浜市、鎌倉市の3自治体が、先進的な取り組みを実施する「SDGs未来都市」に選ばれました。

地域社会においてもSDGs活用に向けた機運が高まり、具体的な取り組みがはじまっています。

私たちの営みは、どこかで途切れるものではなく連綿とつづいてきた歴史であり、
それを未来へと引き継いでいくことも、今を生きる私たちの責務でもあるはずです。
そのための指標の一つが、この「SDGs」です。

ただ、この「SDGs」という言葉。まだ、その名称の認知率さえ全国平均で16%にとどまるのも事実です。[※]
この目標を共有し、達成するために、まだまだ多くの人々が、汗をかかなければなりません。

私たちの営みを未来へとつないでいくために、関東学院大学でも多くの研究者たちが課題に向かい合っています。
みんなの未来が、シアワセであるために。
研究者たちの成果と、彼らが想像する未来の姿の一端を、本冊子でお目にかけます。

－ 持続可能な世界を目指して－
それぞれが取り組む S D G s

地球規模で 持続可能な 社会を目指す

INTERVIEW 01

「SDGs」とは

近頃、あちらこちらで「SDGs」という言葉を目や耳にする機会が増えてきています。「Sustainable Development Goals(＝持続可能な開発目標)」の頭文字であるSDGsですが、聞いたことはあったとしてもその内容は今一つピンとこないという人も多いのではないのでしょうか。SDGsは、2015年に開催された国連持続可能な開発サミット内で採択された、いわば全人類の目標です。2030年までに世界中で達成されるべきことがら、17の目標と169のターゲットとして示されています。

「前身の『MDGs(ミレニアム開発目標)』から今回の『SDGs』になって一番大きく変わったのが、抱える問題が途上国に限ったものではなくなったという点です。課題は途上国だけでなく先進国にもあるものです。『誰一人取り残さない』というコンセプトのもと、それぞれが目前にする課題を克服した先に、地球規模で持続可能な社会を目指すというところが、SDGsの最も大きな特徴です」と、経営学部

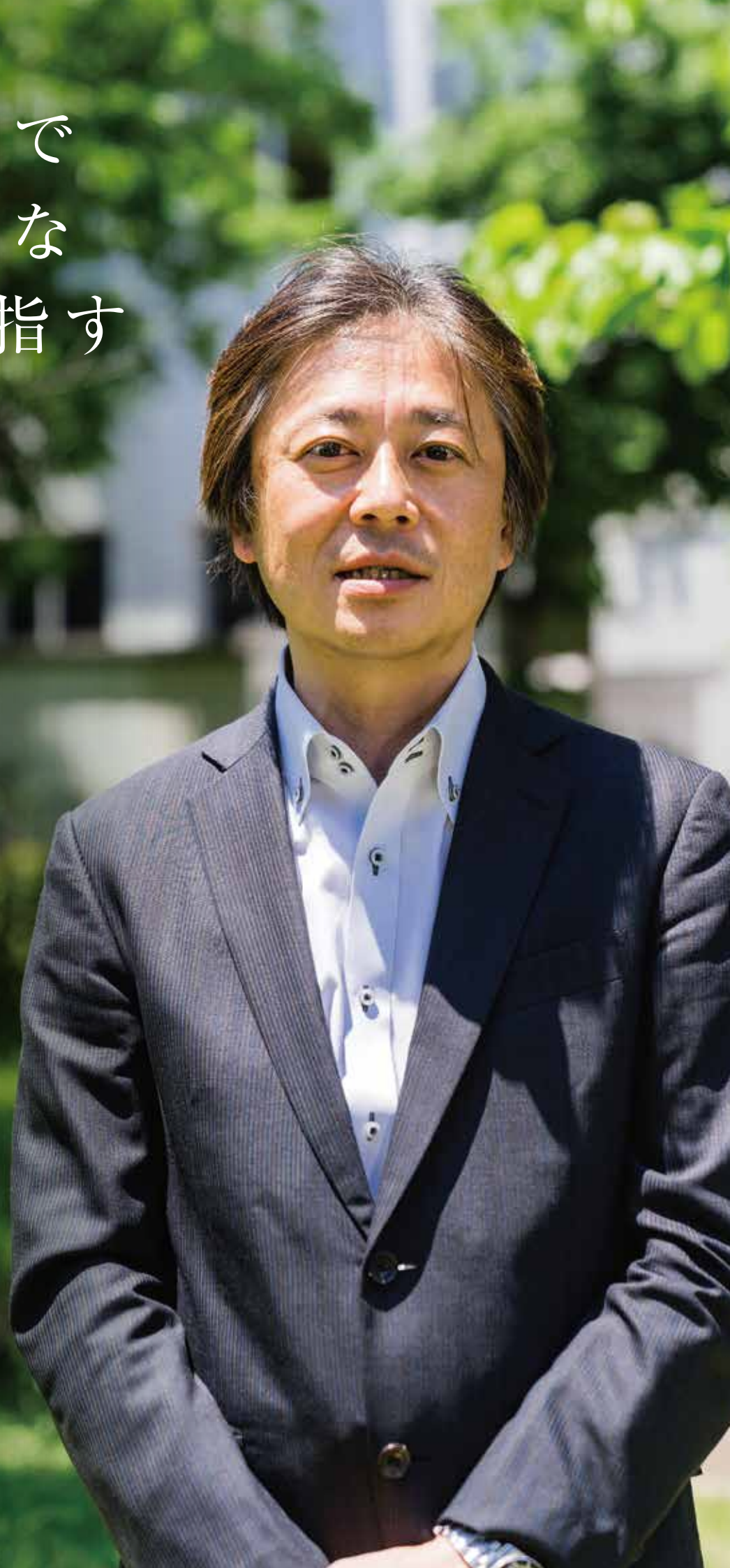
小山 巖也

YOSHINARI KOYAMA

経営学部経営学科 教授

〔学 位〕博士(商学)

〔専門分野〕「企業と社会」論



なぜSDGsが今、注目されるのか

2015年に国連でSDGsが採択されてから、今年で4年が経ちます。最近になってSDGsに触れる機会が増えてきたように感じるのには、どうやら訳がありそうです。日本政府のSDGs推進本部は、2019年をフォローアップの年としています。これまで各省庁がどれくらい課題解決に向けて動いているのか確認されるといこともあって、私たちの目にも徐々に具体的な動きが見えてくるようになったようです。小山教授によれば、実際にビジネスの現場

でもSDGsの認知度は上がってきていると

いいです。「先日(2019年春)ある企業で課長クラスの方を対象にした研修を行ったのですが、およそ1/3の方がSDGsについて認知されていました。2018年頃には、SDGsの認知度が1割程度と言われていたことから考えると、大幅な伸びですね」。

ビジネスパーソンの中で、SDGsに対する認知度が上がりつつあることで、企業活動にも

具体的な動きが見え始めています。

「これまでは商品やサービスにどれだけ付加価値をつけられるかが、他社製品との差別化に大事なことでした。しかしコモディティ化(性能、品質、ブランド力などに大差がなくなり、顧客からみて同じようなものに映る状況となること)が進めば、その背後に透けて見える社会的背景や価値へどれほど共感してもらえるかが、そのまま他社製品との差となるわけです」。

企業にとっては社会貢献も大事な活動ですが、もちろん本業で利益を上げることが重要なことに変わりはありません。これからも企業として活動を続ける上で、社会の側も企業の側も両方がサステナブルであることは必要不可欠になります。持続可能な姿になるために何が必要か、未来のあるべき姿から逆算(バックキャスト)的な思考で考えるときに、SDGsという仕組みの活用はとても相性が良いようです。



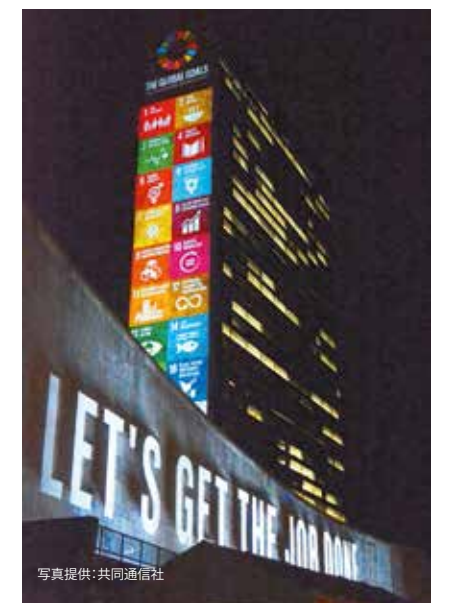
大学とSDGs

社会のいたるところにSDGsで示されている課題は存在しています。これまで知る由もなかった課題が、もしかすると自分たちの持つ技術で解決できるかもしれない…。SDGsの169のターゲットを紐解くと、将来の市場が見えてくるといっても過言ではないでしょう。そして、もちろん大学にとってもSDGsを意識することは重要だと小山教授は続けます。

「例えば本学の材料・表面工学研究所では、青森県警とタッグを組んでLED信号機の雪を落とす技術を開発しています。LED信号機は環境負荷が小さいので普及すればSDGsの

7番の目標である『エネルギーをみんなにそしてクリーンに』の達成に貢献します。しかし、LEDはほとんど発熱しないため信号のレンズ面に付着した雪が解けず、視認性が悪くなるという問題がありました。この技術が活用されれば信号の視認性が高まり交通事故を減らすことにつながりますから、SDGsの3番の目標の中にあるターゲット3.6『2020年までに、世界の道路交通事故による死傷者を半減させる』の達成にも貢献することになります。大学では様々な研究が行われています。社会実装の面でも、研究の方向性を考える上でも、研究者がSDGsを意識することはますます大事になる

でしょうね。経営学の視点を持つ者としては、大学が持つ研究シーズをSDGsの観点から事業化できればおもしろいと考えています」。



写真提供: 共同通信社



あらゆる場面を 想定しながら 水の使われ方を 考えています

大塚 雅之
MASAYUKI OTSUKA

建築・環境学部建築・環境学科 教授

〔学 位〕工学博士

〔専門分野〕建築・環境設備、水環境・給排水設備

INTERVIEW 02

人の生活に密着する「水環境」

喉が渇いたとき、用を足すとき、体を清潔に保つとき…。「湯水の如く」という言葉があるように、私たちは日々何気なく水やお湯を使っています。しかし清潔な水は、世界的に見ると貴重な資源の一つです。人にも環境にも優しい「水回り」に関する研究で、業界をリードするのが建築・環境学部の大塚雅之教授です。身の回りの水を考えるときには、大きく二つの切り口で捉える必要があると大塚教授は言います。

「まずは『使う』場面です。一番身近なところでいえばトイレや台所、洗面所にお風呂ですね。水として使うこともあれば、エネルギーを加えてお湯にすることもあります。ここでは、水資源の使われ方とエネルギーの使われ方を考えなければなりません。そして使われた水は『流す』ことになります。排水や下水の設備が不十分だと、衛生面や環境面で問題を起こしかねません。より良い使い方、流し方を追い求めています」。

また普段ありふれた水も、非常時になるとその貴重さが一気に増します。災害時などで水の供給が断たれてしまうと、途端に普段通りの使い方ができなくなります。このような状態での水の使われ方についても、大塚教授は研究を進めています。

「国や地域によって水資源量には差がありますし、時代とともに水資源の使われ方は大いに変化しています。また、普段と非常時でも使われ方は変化しますし、人によっても異なります。あらゆる場面を想定しながら水の使われ方を考えています」。

すぐそこにある「イノベーション」

大塚教授の研究から生まれた技術は、すでに私たちの身の回りで使われているものも少なくありません。例えば台所や洗面所のシンクで使われるシングルレバー水栓には、新しいものだと言え、水とお湯を切り替える際「カチッ」と音になるものがあります。



「昔のシングルレバー水栓は音がなりません。レバーを真ん中にして水だと思って使っていても、実は、給湯器にガスが着火され、お湯やガスのエネルギーの無駄使いをしていた…。なんてことも多かった。これはもったいないということで、様々な人の使い方モニターしながら研究を進めた結果、生まれた音があの音なんです」。

この他に、研究の産物は、見えないところにも実装されています。その代表が建物の排水システムにあると大塚教授は続けます。

「トイレに溜まった水は『トラップ』といって、臭気が排水管側から上がってこないよう蓋の役割をしています。何も対策せずに高層住宅の上階から水を流すと、排水管を流れる

水の勢いで管内の圧力が変化してトラップが破れてしまいます。海外ではこれが原因で感染症の集団感染を起こした事例もあります。私たちが考案した、管内の圧力を緩和させ、排水が管内をスムーズに流す技術は、製品として今や多くの超高層ビルでも使われています」。



時と場合に応じて 最適な水の使い方があるはず

世界が直面する問題解決に向けて

水環境の改善とエネルギー対策は、17あるSDGsのターゲットにも大きく掲げられています。大塚教授の研究は世界的に解決すべき問題の真ん中にあると行っても過言ではありません。

「SDGsという大きなスローガンは、私たちの研究にとって大きな追い風になっています。例えば日本ではトイレが衛生的で安全なものになりつつありますが、海外だと決してそんなことはありません。SDGsは世界規模で取り組む課題ですので、衛生的な水環境を持つ日本が貢献できることは大きいはず。私たちは、ますますこの課題に寄与しなければなりません」。

節水も大事だけれど、節水しすぎると排水が詰まるなどの衛生的なリスクが高まる場合もあります。時と場合に応じて最適な水の使い方があるはずだと大塚教授は考えます。

「環境負荷を減らすため我慢するのではなく、できるだけいつも通りに近い形でどう持続可能な利用を可能にするか考えねばなりません。それは災害時などの非常時利用を考えることにもつながります。持続可能性をうたうのであれば、どんなときでもできるだけ快適に、無理なく使えなければいけませんよね」。





石坂 貴美
TAKAMI ISHIZAKA
経済学部経済学科 専任講師
〔学位〕博士(国際貢献)
〔専門分野〕開発経済学、国際協力、地域研究

問題解決に 向けた第一歩は、 まず関心を持つ ことから始まります

INTERVIEW 03

貧困に立ち向かうために必要な「安心」とは

地球上には現在200近い国や地域が存在しています。先進的に発展を遂げた国もあれば、これから発展を遂げようとする国など、置かれている状況は様々です。中でも、いわゆる途上国と呼ばれる地域は、地理的環境や気候などが厳しい場所も多く、貧困や健康福祉など様々な問題を抱えています。また、人々の生活を守る社会保障制度についても、未整備であることが珍しくありません。経済学部の石坂貴美専任講師は、開発途上国に

住む人々のもしもの時を守る「セーフティ・ネット」について、アジア圏内でのフィールドワークを積み上げた研究を行なっています。「いくら頑張っても所得を得られないようになったとしても、社会保障なしの状態では家族の誰かに病気や怪我などがあれば、仕事も所得もあつという間に失います。かといって財政状況が厳しい国では、社会保障制度を保つこと自体が困難です。現在の途上国では、民間組織などが低所得者や女性向けに少額

の金融サービスなどを提供する『マイクロファイナンス』というものが浸透しつつあります。融資や貯蓄、保険といったマイクロファイナンスサービスが持つ有効性やリスクについて現地に出向いて調査を行い、さらにサービス提供側にフィードバックしています」。



直面することから始まった研究活動

元々は国際協力に興味がなかったという石坂専任講師ですが、大学卒業後に訪れたアフリカでの経験がきっかけで「貧困」と向き合うようになります。

「貧困って『学校がない』『医者がない』だけの問題ではありません。学校があっても家の仕事の手伝いで行くことができない、医者がいってもお金がなくて診療してもらえない。社会システムに関わる根深い問題だと知りました」。



自分の力で貢献できるようになりたいと、染織の技術を習得し青年海外協力隊としてバングラデシュへ行くことになります。しかし、たとえ現地で仕事を生み出したとしても、所得を守る仕組みがなければ一瞬で貧困状態へと戻ってしまう可能性は高いままです。

「そこで途上国の課題について勉強し、現地の人々の安定した暮らしのために役立ちたいと思い立ち、セーフティ・ネットについて研究をするようになりました」。

アジアの国々の社会保障制度について調査すると同時に、再び長期にわたりバングラデシュに滞在して現地の事情を調査するようになったといいます。

「バングラデシュでは国の健康保険制度がないために高額医療費によって貧困に陥る問題をとりあげ、マイクロファイナンスの医療保険の実態を調べました。融資を中心に広く普及しているマイクロファイナンスですが、マイクロ医療保険を提供する機関はごく

わずかで、その補償も十分でないことがわかりました。一方で人々のニーズは高く、今後徐々に普及していく可能性があることをサービス提供者へ伝え、改善策について協議し、サービス向上へつなげました。この他、私が青年海外協力隊員として関わった職業訓練校の卒業生たちが自営業者となり、立ち上げた組合に互助会のような助け合いの仕組みを構築したり、農村では伝統的な相互扶助の再生の可能性を探したりしました」。



現地の人々の安定した 暮らしのために役立ちたい



知ることから始まる国際協力

2000年に国連で採択されたMDGs(ミレニアム開発目標)では、途上国の抱える問題解決に向けて先進国から支援が行われてきました。近年MDGsがSDGsへとアップデートされたことで、いろいろな変化が生じていると石坂専任講師は考えます。

「MDGsは、国際協力や貧困問題に関心ある人のみが知る目標でした。それがSDGsになったことで、国内企業や政府の動きが大きく目に見えるようになったのは良い流れだと

思います。学生たちには自国の目標達成状況のみでなく、途上国の目標達成のためにどのような国際協力を行うべきか、自分にできることはないかという点にも関心を寄せてもらいたいと思います」。

地球規模で起こる問題解決に向けた第一歩は、まず関心を持つことから始まります。

「大学の講義やゼミナールではこれまでの途上国での経験を学生たちへ紹介しつつ、一緒に問題解決に取り組む実践も行っています」。



フェアトレード®商品を紹介する石坂ゼミの学生ら

※公正な取引を通じて途上国の人々の暮らしを支援する貿易

自然環境への ダメージを抑えながら、 人間にとって 必要なものを得る

武田 俊哉
TOSHIYA TAKEDA
理工学部理工学科化学工学 教授
〔学 位〕博士(工学)
〔専門分野〕化学工学

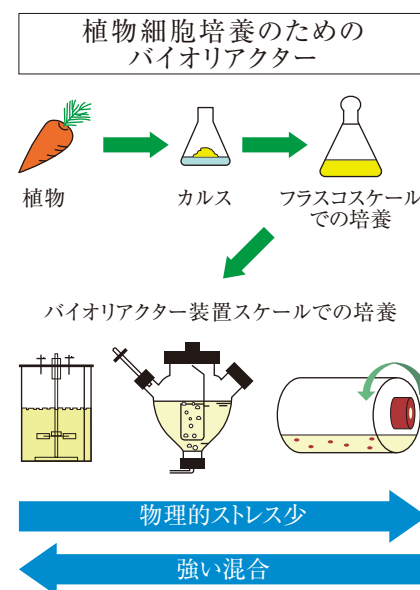
INTERVIEW 04

生き物を活用する環境を作りだす

例えばお酒や納豆などのように、私たちは生き物が生み出す様々な「産物」を使いながら生活しています。生物が生み出す生成物を得るために効率のよい化学反応を行うには、近代的な装置を用いたコントロールが必要です。ここで登場するのが「生物化学工学」と呼ばれる学問領域です。理工学部の武田俊哉教授は、この生物化学工学を専門にしています。

「生物といっても動物、植物、微生物と様々です。その中でも私は、主に植物細胞を対象とした『バイオリアクター』についての研究を長い間進めてきました」。

「バイオリアクター」とは、細胞にとって一番適度な環境を作りだす入れ物のことを指します。先ほど例に出したお酒だと、酒蔵に見られる仕込桶がそれにあたります。対象の細胞が違えば、もちろんそれらに適切な環境も変わってきます。武田教授は長く植物細胞のバイオリアクターについて知見を積んだ上で、近年植物と微生物の中間的な振る舞いをする「微細藻類」を対象とした研究も進めています。



負荷は少なく、成果は多く

化学反応と聞けば、理科の実験を思い出す人が多いかもしれません。バイオリアクター内で生物が進める反応も同じ化学反応なのですが、どうやら理科実験のイメージとは少し違うようです。

「工業的な化学反応と比べて、生物によって進められる反応は環境負荷が低いのが大きな特徴です。細胞自体は有機物ですので、もし細胞が生きていない状態で自然環境に放出されても分解されます。反応で生み出される特殊な物質さえちゃんと処理できていれば、大きく問題になることはありません」。

自然環境へのダメージを抑えながら、人間にとって必要なものを得ることができるのが、バイオリアクターによる生物化学反応の特徴です。また、扱う生物を変えたり環境を変えたりすると、生み出される生成物も変えることができます。

「食に関することだけでなく、エネルギーや創薬で活用につながる化学物質の生成もできます。さらに環境への貢献として、余剰有機物の除去やバイオレメディエーション (bioremediation) と呼ばれる汚染物質の分解なども行うことが可能です」。

応用の幅の広さは、生物化学工学の注目点と言えるのかもしれません。幅広い可能性を秘めた生物化学工学の道をひた進む武田教授が抱く目標は、とても工学的です。

「産物を生み出す生物にとって望ましく、産物を活用する人間にとっても望ましいシステムの構築を目指しています。扱う環境が変われば、性格が変わるのが生物材料のおもしろいところです。生物や装置・機械の特性など、これまでに様々な分野で得られているノウハウを駆使して試行錯誤を重ねていき、社会に生かしていけるシステムができればと思っています」。

産物を生み出す生物にとって望ましく、 産物を活用する人間にとっても望ましいシステムの構築

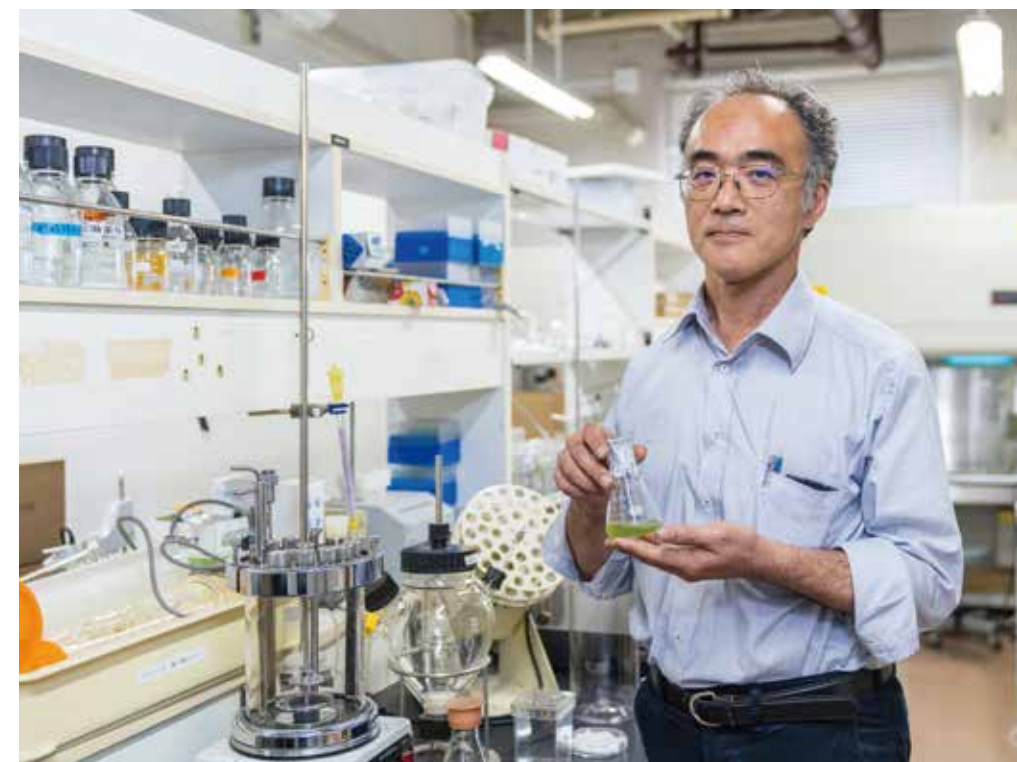
様々な分野を横断するおもしろさ

武田教授は理工学部の応用化学コースの授業を担当していますが、研究の内容はシステム構築のための物理学や細胞を扱うための生物学と、領域横断的です。

「今、生物学は生物の仕組みを分子レベルで見たりして、とても化学的です。むしろ私たちの研究の方が、細胞を育てたりして昔ながらの生物学らしいかも知れません。こうして化学、生物学の枠にとらわれず分野横断して知識を増やし、掛け合わせていくことで新しい目標に向かうのがおもしろいですね」。

SDGsの17ターゲットは、それぞれ専門的でありながら領域横断的な構造を持っています。その中には環境や健康、エネルギーなど武田教授の研究に関わることも少なくありません。

「様々な要素が関わっているので、ある分野で過去に積み上げた知見を別の分野にマッチさせることもできます。こうして技術的に可能になるものも少なくないはず。これって、とても化学工学らしい話であると感じています」。





持続的な農業が、 持続的な 砂漠化防止や 緑化に繋がる

津久井 学
MANABU TSUKUI
栄養学部管理栄養学科 准教授
〔学 位〕博士(生物産業学)
〔専門分野〕食品学、食品科学

INTERVIEW 05

粘る種「サーホウ」との出会い

緑に覆われた大地が、植物の育ちにくい状態へと変わっていく「砂漠化」は、地球規模での環境問題の一つとして知られています。栄養学部の津久井学准教授は、この「砂漠化」を食い止めて緑化に大きく貢献する可能性を秘めた、ある植物の種について研究を進めています。その植物の名は、中国北部・内モンゴル自治区に自生するキク科ヨモギ属の植物「サーホウ(沙蒿)」といいます。津久井准教授のもとに種が持ち込まれたのは、2013年のことでした。

「この種は水に膨潤すると、ほんの数分も経たないうちに糊のような粘り気を出します。

砂漠にまいた種が水を含むと、粘り成分が周囲の砂を固めて地面の流動を食い止めるのです。さらに粘り気を帯びた砂は保水力も上がるので、植物が生えるようになるんです」。少しの降雨でも即時に粘り気を出せるサーホウの種は、砂漠を緑化していく初手として有力な植物であることは間違いありません。しかし現地に自生しているのにも関わらず、全く栽培されていないのです。これには訳があると津久井准教授は続けます。

「実は、有効な利用価値が見出されていないんです。さらに周囲で飼われる家畜がすぐ食べてしまうため、簡単に栽培もできない」。

そこで、サーホウ特有の粘り成分を何か生かすための活路を見出せないかという依頼が、食品の粘りを専門とする津久井准教授の元にきたのです。



活用できるのは粘り以外にも

日本の食文化において「粘り」は、とても重要な役割を果たします。津久井准教授はサーホウの粘り成分を、食品に粘りを生み出す増粘剤として有効利用できないかと考えました。先行研究は多少ありましたが、事例によって粘りの構成成分など全く異なっておりよくわからなかったため、粘りを生み出す成分の分析や温度・pHを変化させるとどうなるかなどを一から徹底的に調べたと言います。

「粘りだけでなく、粘りを取り去った後の種に含まれる油成分が大豆油に近いことも突き止めました。さらに油を絞った後に残る

タンパク質も、植物性タンパク質として活用できるかもしれません。今はサーホウ独特の香り成分を抽出し、香料として利用できないかという研究も進めています」。

たとえ増粘剤として有効利用できたとしても、日本と現地を往来するコストなどを考えると、現状ではまだ経済的な現実味は薄いようです。しかし、増粘剤、油、植物性タンパク質、香料という合わせ技で活用できるとなれば採算ベースに乗せられる可能性もあると津久井准教授は考えています。



食を生み出すためには、 誰かが負担を背負いこむのではなく、 関わる全員が持続的に 幸せを得られるようなシステムが必要

秘めたる価値は皆を幸せに

秘めたる可能性を持つ砂漠に自生する植物は、サーホウ以外にもたくさんあります。

「例えばクコ(黒クコ)には、アントシアニンという色素が多量に含まれています。砂漠のオアシスのような塩害地に生えるアツケシソウ(サンゴソウ)はミネラルを多く含み、ヨーロッパだと“シーアスパラガス”とも言われて食用にされますが、内モンゴルでは見向きもされていません」と津久井准教授は話します。

砂漠地は植物にも人間にも厳しい環境です。産業的な付加価値がどんどんつかないと、現地での植物栽培には繋がりません。研究の口火を切ったサーホウは、今では興味を示す

民間企業も複数現れており、現地に視察へ行く会社もあると言います。

「収穫効率が悪ければ産業にはなりません。ちゃんと畑を作って環境を整え、そこで収益が上げれば栽培は長続きします。持続的な農業が、持続的な砂漠化防止や緑化に繋がるのではないのでしょうか」。

砂漠化は黄砂やPM2.5にも関連が深いとされます。砂漠の緑化は、日本に住む私たちにとっても大事な話です。また、農業の持続性という面でも私たちと関わりがあるようです。

「国内の農業従事者は減少の一途をたどり、持続的ではありません。食を生み出すため

には、誰かが負担を背負いこむのではなく、関わる全員が持続的に幸せを得られるようなシステムが必要です。そのために私たちは、目の前のターゲットが秘める新たな価値を洗いだしたいのです」。



君塚直隆教授が、サントリー学芸賞を受賞

国際文化学部の君塚直隆教授が、公益財団法人サントリー文化財団による2018年度の「サントリー学芸賞(政治・経済部門)」を受賞しました。贈呈式は、12月10日に東京都内で催され、記念の盾などが贈られました。

君塚教授は、英国王室研究の第一人者で、約20年にわたって英王室に代表される立憲君主制の国家体制について、歴史学の手法を用いて分析してきました。今回は、18年2月に出版された著書『立憲君主制の現在—日本人は「象徴天皇」を維持できるか』を中心とした、これまでの君塚教授の活発な著作活動が高く評価されたものです。

今回の受賞の中心となった『立憲君主制の現在—日本人は「象徴天皇」を維持できるか』では、英国をはじめとしたヨーロッパの立憲君主制や、アジア・中東エリアの君主制の事例を解説するとともに、日本の「象徴天皇制」について幅広い視点から分析しています。

君塚教授は「これまで私の本を担当してくれた編集者の方々にようやく恩返しができた思いです」などと喜びを語りました。また「君主制の国家に目を向けると、大権は形骸化していても、君主の存在そのものが、

その国の政治や外交、社会にもたらす安定性や継続性を見出すことができます。本書が日本の皇室の継承について考える一助となれば」などと、現代における君主制の存在意義についても思いを語りました。



大塚雅之教授が、日本建築学会賞を受賞

本誌にも登場する建築・環境学部の大塚雅之教授が、一般社団法人日本建築学会の「2019年日本建築学会賞(論文)」を受賞しました。贈呈式は、5月30日に東京都内で催され、賞状などが贈られました。

今回の受賞は大塚教授が取り組んできた「建物内排水システムの排水性能評価と計画・設計手法に関する一連の研究」が対象で、節水型のトイレの登場や、生ごみ処理のためのディスパーの導入などで生じた、建築の排水システムに関する新たな課題に対する取り組みが「社会的貢献度および実用的価値は極めて高く、今後の同分野のさらなる発展に寄与することが期待される」と高く評価されました。

日本建築学会賞は、国内の建築関連で最も権威ある賞で、論文、作品、技術、業績の各部門が設けられています。大塚教授は、論文部門で選考委員会での審査を経て受賞が決定しました。論文部門での受賞は関東学院大学では初めてで、大塚教授の快挙です。

大塚教授は「取り組んできた研究の成果が、こうして高く評価され大変うれしく感じています。建築の水環境に関しては、まだまだ解決

すべき課題を抱えています。都市や建物の省エネルギーや水資源確保など、社会に還元できる成果を挙げられるよう努力していきたいです。あわせて、講義や企業との研究活動を通じて、この分野で社会に貢献できる人材をこれからも送り出せれば」などと話しました。



施設とは何か—ライフストーリーから読み解く障害とケア

麦倉 泰子

この本で焦点を当てたのは、入所型の「施設」の構造です。入所型の施設は、障害のある人を社会から隔離し、無力化する装置であるとして、障害者運動の中で批判されてきました。

施設のケアのオルタナティブとして提示されるのは、障害者運動の中から生み出されてきたパーソナル・アシスタンスという支援の理念です。個別化された支援を実現することによって、障害のある人の参加を阻む様々な障壁を除去し、無力化された状況を覆すことを目指しています。パーソナル・アシスタンスの特徴と、実現のために必要な条件を明らかにすることを目指しました。

同時に、ケアを行う側の人たちが経験する苦悩や葛藤にも注目しました。ケアを受ける人たちが経験する困難とは、決してケアを行う人間の態度や考え方によってのみ引き起こされるものではありません。むしろケアを行う側の人たちも、困難に直面して葛藤し、

自分ひとりの力ではどうすることもできない壁の厚さに無力感を覚えて思い悩むことが多くあります。実際にヒューマン・サービスの従事者が抱えるストレスとバーンアウトに関する一連の研究は、真摯にケアを必要とする人に向き合おうとする人であればあるほど苦悩の程度は深くなり、時には相手に向き合い続けること自体が不可能になっていく事態が生じることを示しています。

このような事実は、現代社会のケアをめぐるシステムのなかに、ケアを受ける側の人とケアを行う側の人と共に「無力化」され、脆弱性を抱える存在になっていく構造上の問題が存在することを示唆するものです。この点にも分析の焦点を当てました。

書名：施設とは何か—ライフストーリーから読み解く障害とケア
著者：社会学部現代社会学科教授
麦倉泰子(専門分野:障害者福祉、福祉社会学)
出版社：生活書院
出版年月：2019年2月



説き語り看護経済学入門 エンパワメントモデルへの招待

金井Pak 雅子

本書は、看護経済学という比較的新しい学問分野を探究した内容です。難しい数式は一切使っていません。著者の9年間に渡る米国留学で、学位取得のみならず、結婚・出産体験、さらには子どもが先天性疾患のために生後4日目で手術を受けるという経験から、日本と米国の医療システムの違い、看護職の働き方の違いなど、経済学の基本である希少価値の効率・公平分配について、看護学の視点から解説しています。

本書は2部構成で、一部が理論編、二部が実践編となっています。理論編では、第一章として、看護師の需給推計について、トロント大学リサーチユニットにおけるヒアリングをもとに、カナダの人的資源計画の概念モデルを紹介しています。第二章では、自身の博士論文の基盤となったワーク・エンパワメント理論について解説しています。第三章では、看護師長のリーダー

シップ行動について、ワーク・エンパワメント理論の具体的な活用方法を解説しています。

第二部の実践編では、Q&Aスタイルで看護の価値と財について、サービスとは?看護労働とは?看護の生産性とは?などについて解説しています。さらにエンパワメントの実際として、看護師の働く環境、キャリア開発、よりおもしろく仕事をする事について、様々な観点から具体事例を交えて解説しています。

本書が、今後の看護界の新たな知識開発の一助となることを願っています。

書名：説き語り看護経済学入門 エンパワメントモデルへの招待
著者：看護学部看護学科教授
金井Pak 雅子(専門分野:看護管理学)
出版社：ライフサポート社
出版年月：2018年8月

